

# 作家たちは、今

現代美術 いまいずみ けんじ 今泉 憲治



「いつも実験と描いている」と語る今泉さん

今夏、長崎市の「水の波紋」展で発表した作品もその線上の仕事だった。それが、最近の個展で一転して平面に戻った。キャンバスを走るペンキや墨汁、木炭などの激しい線の動きの中に、デフォルメされたゾウの顔が浮かんでいる。しわを伴って盛り上がった鼻や牙を彩っているのは、赤や黒、深緑などの強い色だ。

「このころ、立体を多く手がけて、ポリウムが

## ゾウに託して内面を表現

以前、あるグループ展で、彫刻絵画でも呼べそうな布を素材にした巨大なこの人の作品を見て、群を抜いてスケールの大きな造形力に驚嘆したことがある。同時に、どんな動機によって、このような奇抜で人目を驚かさず作品が生まれ

るのかと不思議にも思った。年にニューヨークから帰ったのだが、最近、福岡市美術館で開いた個展を見、話のポリウムのある形態を聞いて、以前の作品にさかのぼって胸に落ちる気がした。恐らく新しい平面の作品にこの作家の本質が素直に表れていたからだろう。

会場で見せてもらった資料写真によれば、一九八三

るのは、九三年暮れ、福岡県立美術館で開いた個展「ELEPHANT AC CIDENT」象の災難」展のころからだろう。布に綿を詰めて、ゾウの足や鼻、牙などをかたどったものに極彩色の赤や黒、緑を塗った、巨大でグロテスクな縫いぐるみ。血の海であえぐゾウは、何かを告発しているようにも見える。

つぎ過ぎた気がしたもので……。ただ、立体のしわが気に入っていたので、しわで心の中のもやもやしたものを表現できないかと、植木などに使う「寒冷紗」を張りつけたんです。

ゾウのイメージは残っているが、むしろ作家の内面をそのまま表出したような画面だ。怒りに燃えたり、悲しみを浮かべたり、人に

問いかけるように見えたりするいくつかの目は、ゾウのものというより作家のものなのだろう。

「これまでは造形的な手段で見せようとサービュしていた。今度の個展ではほくがこだわっているのはここだよ、というふうなものに絞ったんです。恥ずかしくもあるし、気持ちがあすきりしたようにもありますね」

量感のある形態のパターンがパターンを生むといった形で展開してきたように見える。これまでの仕事の流れが、ここで大きく変わる

った印象である。ゾウのイメージが、ここでは自己表現のための言語として自在に使いこなされている。様々に繰り返された造形上の実験は、このイメージを得るために必要だったの



「UNTITLED」

「これ(自分の本音だけを表現すること)では、プロの画家としてはダメなのかもしれません。自分をさらけだしたら、大したもの何もないという不安もあります」

タイトルを「UNTITLED(無題)」にしたのも初めてのことだという。自分の内面の裸の姿には名付けようがなかったということもあるが、その「無題」から、新しい境地に乗り出そうという意気込みが伝わってきた。

(文、写真・小林 清人)